明治卅六年四月二日第三種郵便物認可　毎月一回二日發行

家庭雜誌

第貳卷

第四號

明治三十七年四月二日發行

親子の關係（堺　枯川）……一
みえ坊の家庭（夏蜜柑物語）……六
不幸の雨幸福の雨……一二
花を作つて見たくなりました（久田二葉）……一三
△種子島の新家庭△運動に適した淸い趣味△花がすきになりました△腕白時代の趣味△妹が愛する花の感化△時が來れば可愛らしく咲く△精神上の變動と花△其他
按摩の敵愾心（畵）……一四
女學生と同乘（吉田抱水）……一五
兒童研究の資料（宮井岩太郎）……一七
△潔の朝△潔の御馳走△潔の日中△潔の明方△潔の夜分△潔の愛犬△潔の禮式△潔の洒落△潔の愛情△其他
號外來！（畵）……一九
內職の事……二四
△造花△編物△刺繡
吾婦人（有本次郎）……二六
萬歲の聲（畵）……二七
瓦斯の應用と臺所……三〇
貴夫人の繃帶捲……三一
編輯便り……三二

由分社

東京市京橋區新湊町一丁目十七番地

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌合本第壹卷

一册價金五十錢　郵税金八錢

▲本誌讀者に限り當分の内壹割引すにて差上ま

巻頭には便利なる目錄を添へ、製本は美麗高尚、クロースにて金文字入也。これを以て細君の文庫を飾るに宜しく、家庭間の贈答品としては更に宜し。新年の際若干を製本して、之を江湖に試みしに、思ひの外の高評を得て忽ちの内に賣切となれり。今度幸に數百册出來したれば至急御申込ありたし。

發行所　東京京橋新湊町　由分社

●本誌定價及廣告料

一部	一ケ月	六ケ月	一ケ年	全國
金六錢	金六錢	金卅二錢	金六十錢	無遞送料

廣告料　特別一頁七圓、普通一頁五圓

注意

一、本誌は毎月一回(一日)發行とす。
一、本誌の購讀料は小爲替を以て御遞送の事。
但し郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事。
一、購讀者は住所姓名を詳細に記して申込まれたし。又轉所の際は新舊の宿所共併せて御通知あるべし。
一、爲替振込局は芝口局宛受取人は由分社宛の事。

明治三十七年四月一日印刷
明治三十七年四月二日發行

發行兼編輯人　東京府豐多摩郡千駄谷村字原宿百九十一番地　西村渚山

印刷人　東京市京橋區日吉町十番地　中村彌助

發行所　東京市京橋區新湊町一丁目十七番地　由分社

大賣捌所　上田屋　良明堂　東京堂　東海堂

印刷所　東京市京橋區日吉町十番地　近藤商店

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌

第二巻
第四號

親子の關係

―家庭に於ける階級制度の二―

堺枯川

夫婦の關係に比しく親子のそれにも亦二つの方面がある。其一は愛情的の方面、他の一は經濟的の方面――即ち衣食住の事である。然るに、今日の社會の狀態では兎角この經濟的關係が强烈となり、爲に最も貴むべき愛情的方面が著しく汚され、若しくば傷けられるやうになつて來た。

譬へて云へば夫婦の成立の場合にも女子は男子の私有物と云ふ考があるが如く總て子は親の物である。子は親の私有物であると云ふ思想――丁度世間には「親が其娘を賣るなる言葉がある。最も其子を賣る迄に至るには「種々難澁な事情もあらうが、併しこの「賣る」と云ふ一語に就いて考へる丈でも、既に娘を己の私有と思つて居る證據は、歴然として擧つて居るのである。又此「賣る」なる言葉に對して、「親が子に掛つて、左團扇で暮す。」なる語もある。親の意見に依ると、子供をかうやつて育てゝ置くからには後で恩返しに養つて貰ふのは普通の事である。と、萬事かう云ふ風に解釋して、恰も子供を養育し且つ教育する事は、商賣上に資本を卸すのと同樣で、それから利子でも取るやうな心持で居る。

農夫が自分の畠に茄子苗を植えて、時節が來ると、それを殘らず收穫する。今日の親と子の關係に、果してこれと異なる點があらうか否や。

繰返して又一例を擧げると、世の父親が其子供を高等の學校へ入れた時には、

「かうして置けば、あとで月給を取つて呉れる。」

と、初めから算盤球を彈いてからかゝるのである。又男の子のない家では、養子をする例が甚だ多い。さうして、此時にも矢張金員を出して人を買ふと云ふ形は

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

充分ある。即ち、『爾來學費の補助をする。』とか、自分の娘と未來は結婚させる。』などの條件で引取ると云ふ有樣ではないか。極言すればこれも亦一種の品物視せられて居る證據であらう。それと同時に、娘を嫁がす上にも、恐しく現金的な賤しい所が往々にして其父母の考への中に讀まれるのである。

『あの家へ遣つて置けば、まづ／＼大丈夫、後の爲にも宜いから。』

と、丸で娘其人の愛と自由とを踏付けた仕方である。其の心情の如何に卑劣なるよ。

近頃毎日新聞の紙上で、木下氏が火の柱と云ふ小説を書いて居る。そうして此小説中に顯はれる一人の娘――これが大に余等の意を得たものである。其娘の父親と云ふのは御用商人であるが、彼はある海軍の大佐に娘を所望される。所が其商人には御用品買込みの野望あり、特に其大佐と關係を付けて置けば、何かの事に利益であると云ふ考へから、早速それに同意した。それは好かつたが、新時代の空氣を呼吸した見識ある

娘に於ては、斷じてその親の命令に從ふべき理由は見出さなかつた。彼女は嚴然として父親に對ひ、

『假令その爲に我家が倒れても、妾は決して動きませぬ。』

と、斷言した。余は今日の女子には總じて這般の決心がなくてはならぬと思ふ。親の財産――嫁入仕度は幾枚でも買ふ事の出來る、其親の財産が一文もなくなつても好い。只愛の神聖を汚がすには換へられぬとの決心は實に貴むべき女子の大覺悟である。

さて、斯くの如く今日迄の親子の愛情的關係は、經濟的關係の爲に散々傷けられつゝ續いて來た。かの『孝行』の意義の如きも、其內容を深く吟味すると、實は經濟的の爲に愛情の方面を犧牲にする――只此事より外はない。これ云はゞ美名の本の醜名である。

翻つて思ふに、これも亦無理がない。實際親の身になつて見れば、今日の社會ではどうする譯にも行かぬ。それは止むて得ぬのである。先づ今日では子供を教育する責任が全く親にある。

又子を產む。それは普通の事だが、これに一々食を與へ、衣服を與へて養育するのは、一に兩親の責務となつて居る。世の親となれるもの丶大苦痛は、全くこれに過ぐるものはないであろう。特に正直な律氣者の貧しい家には、得て澤山な子供が出來易い。そうして社會はそれに對して如何なる評語を下して居だらう。『自分が勝手に拵へたのだから勝手に育てるなりどうなりするが善い。と云ふのは普通で、酷いのは『因果の固り。』『天罰覿面』などと冷かすのである。

總て社會は斯くの如く無責任な言葉を以て、子供を澤山持つて居る兩親に對するにも拘らず、一旦其親の何れかゞ、貧の結果子供を殺すやうな事があるとすれば如何。社會は果して默して居るであらうが、矢張無責任な評語を下して濟して居るであらうか。こゝに丁度好い例がある。新聞の雜報を見ると、母親が盲目の子供を水に衝起したとあるが、併しこれも能く考へて見れば同情すべき點がないでもない。子殺し、子おろし、總じて此種の罪惡は、多く生活の不如意から起つて來る。有名な棄兒の詩に、此子棄てざれば此身餓ゆ、此身餓ゆれば此子育たず。棄つるは非乎、棄てざるは是乎、人間恩愛此心迷ふ。』と云ふのがあるが、これ明かに愛情的關係と經濟的關係との衝突を示して居る。而して社會は常に此等の事實を愛情的關係からのみ見て居るから、鬼と呼び蛇と稱へ、百方口を極めて其親の無慈悲を責立てるのである。何ぞ知らむ。其原因は一に經濟的不如意が主となつて居るので、却て其無慈悲呼はりをする社會こそ、鬼と云ひ蛇と云つても好い程である。何となれば、人間自然の情として、故意に其愛兒を殺す勇氣か何處にあらう。只社會の惡組織が段々とさうするやうに仕向けて居る。かう考へて來るなれば、社會の批評の撞着は正に動すべからざるものとなつて來る。曩には『自分か產んだものなら勝手にするがよい。』と云つて置き乍ら、かう云ふ塲合に臨むと、直に其親を捕へて鬼呼はり、何と蟲の餘り好過ぎた話ではあるまいか。

以上で世の親が兎角子供を商品視し、又或時には大

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なる罪惡を敢てするやうな事も、今日の所では萬々止むを得ぬ自然の結果であると云ふ事が明かになつたであらう。然らば、こゝに今一歩を進めて、今後も矢張仕方がないで滿足し、かくの如き悲惨な現象をば其儘にして措くべきか否か。而して若しこれを救濟する策がありとすれば、それはどう云ふ方法であらうか。

余は別に他に方法ありと考へられぬ。只此弊害を根治する一つの策は、今日迄の經濟的關係を悉く廢して、愛情的の關係ばかりを安全に發展せしめる事であらうと思ふ。而して、社會主義の實行は此の理想を全うするものである。元來世の中は各々一人々々で獨立して生活するものではなく、皆な共同して初めて生活が出來るものである。一例を擧げると、かの鐵道を見よ、それは果して誰の手に成りしものか、土方か、然り土方も居たであらうが、其レイルはどうしたか。それには鐵工者と云ふのが居て初めて作られた。又そのレイルを敷くには技師の測量も必要だし、更に其技師の毎日の食料は何處から來ると云へば、それは百性の供給で、彼が粒々辛苦の結果に外ならぬ。然し此百性とても自分一人で其米を作つたとは申されない。肥料、農具、若しくば其田を初めて開墾した人は誰であるか。と云ふ風に根堀葉堀り穿鑿するならば實に涯限がない程ある。

又こゝに一人の學者があつて、學術界に何物かを發見したと云ふ。併し熟々考へて見ると、矢張其學者一人が直に全部分を發見したとは云ひ兼ねる。名高いワットの發明も同じ事で彼は其最後の所を發明したのである。して見れば、世の中にありとあらゆるもの、一として人間只一人の手に作られたものとてはない。今日富豪と呼ばれつゝある數多の金滿家とても、亦この理窟に洩れず、云はゞ種々雜多の人間の力が集り、漸くにして大金が一所に積まれた迄の事である。これを自分一人の金として私有すべき理由は更にない。ある敎訓話の中に、三匹の尾長猿が池の中に林檎を見付け、其中の第一者が先づ枝に結付き、次に第二者、第三者と互に繋合つて、到頭其林檎を拾ひ上げた。併し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其拾上げたは第三者であつたから、彼は其功に誇り、終に他の二匹に配分しなかつたと云ふのがあるが、丁度今日の富豪の遣り方と同じである。自分が其林檎を得る迄には、第一者第二者と云ふ踏臺がある事を丸で忘却した心得方で、これ程無慈悲で慘酷な事はない。

今日の親子關係はかゝる富豪の壓迫の爲めに日に日に暗所へ陷られて行く。一體親が如何程難澁なればとて、老後を其子に養つて貰ふと云ふ考は正當でない。何も親が老いたからとて、子が之を養はねばならぬと云ふ理由があらうか。親なる人はそれ迄に社會の事に勞して來たのだから、宜しく社會全體が其功勞者を養ふ工夫をしなければならぬ。又子は決して親の爲に出來たものではない。社會全體の爲に出來て居るのである故、それも社會全體が協同して養育する必要を見る。それ故、世の中の人々は、各々自分の働らくべき事に全力を濺ぎ、そうして社會全體に養つて貰ふべきである。小供も然り、老人も亦然り。

悲むべきかな、今日の社會は非なる社會である。一方には極々少數の人が土地とか金とかを占有し、他方には大多數がその爲に苦んで居る、尤も現今でも多少社會主義の理想が實現せられつゝある國に於ては、老人院と云ふのがあつて、六十歲以上の老人には年金を賦與して居る。即ちオーストラリヤ、丁抹などが其例であるが、一歩進んでは、婦人保護法が當然行はれて來ねばならぬのである、今の學校の女敎師などで、姙娠する者があると、二月杯欠席を許して月給を拂つてやる事があるが、これは極少さい例證ながら、大に進んだ考で、將來はこれを大きな社會に及ぼさねばならぬ。

若しそれ世の中に經濟的關係と云ふ忌いものが廢滅し、溫くして淸らかな愛情的の關係ばかりが自由に翼を擴げるやうになつたならば、其時こそ世は一個の樂園であらう。子を殺すの、おろすのと云ふ悲慘な物語が何れの國にあるだらう。況や己の可愛き娘を賣飛ばすなどと云ふ事は、終に全く根絕するに至るであらう。（第三回婦人講演席上にて）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

見え坊の生活

＝夏蜜柑な食べなんだ記者の落膽物語＝

方々に散在して居る友達の家を訪れ、その細君の手になつた牡丹餅で以て、したゝか胃腑を懲ろかした彼岸の中日、即ち春季皇靈祭の當日であつた。

自分は平生酒類も用ひぬ方の側で、先づ下戸と云ふ肩書を頂戴する事に辭退の出來ぬ人種――それを見込んだ友達の細君達は、玄關先に顯れる自分の顏を見ると、

「まあ、貴君は大變幸福な方ねえ。」

と如何にも自分の幸福を心に深く信じて居るものゝ如く、前ぶれして、嫣然笑ふ。併し、其笑ひや全く親切が動氣となつて居て、云はゞ手製の牡丹餅を此種の鑑賞力を持つて居る自分に風味させたいと云ふ、その優しい心であつたに相違ない。斯樣な調子で、其日は到る處で歡迎され、抑も朝の九時頃から始まつて、午餐拔きになる迄での梯餅（若し斯樣な熟語が作れるものとすれば）をきめた、が流石にさうなると、甘黨の勇士もそゞろに何か淡泊な酸味を有つた食物が欲しくてならぬ。八百屋の店頭に飾つた果物などを見て、非常に羨しく思ひ乍ら、頻りに大手を振り、大路に歩んで胃の消化力を助ける事に骨を折つた丁度其歸途の事である。自分は幸ひ道筋と云ふ便宜で、又もある友の家に立寄つた。自分が書きたいと思ふ主題は、實はこれから始まるので。

立寄つた家と云ふのは水入らずの夫婦者で、外に下婢を一人使つて居る。小さい乍らも門があつて、室數は總てゞ四室、夫婦暮しとしては至極格好の建物である。併し自分が平生から考へて居るのに、どうも此家に下婢があると云ふのが贅物のやうに思はれる。實際此樣な新世帶に助手を置くやうな用事があらう筈もなければ、又財力も決して豊かであると云はれない。主人はやつと三十圓内外の月給取り、別に親讓りの資産がない證據には、借家の敷金を出す時でさへ少なからぬ狼狽をした程ではないか。其程の身分であるのに、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何を苦んで下婢などを雇ふのだらう。主人は毎日半里以上もある所へ通つて居るのだから、何も郵便を出しに行く丈の勞が厭れる譯もなからう。又細君とても新主義の學校を出て、體育にも可也は時間を費して來た身の上、バケツに二三杯も汲んで置けば、それで終日水の不足がないと云ふ樂な境遇に居て、何を苦んで下婢などを雇つたのであらう――まあ此樣な風に、此新夫婦の生活狀態を見る度には、私に疑念を挾むやうな譯であつた。

丁度此方では午餐の膳が取片付けられた處、卅分斗り界隈を散歩しやうと云ふので、三人打連れ立ち、大通りの方へ横町から歩を移さうとすると、急にばらばらと意地の惡い雨である。

『あら、どうしませう。』

細君はそれと同時に叫んだ。成程能く見ると、細君は何時の間にか美しい衣服と着換えて居たのである。

『もう廢さうぢやありませんか。ねえ。』

益々訴へるやうに聞えるので、自分は大に氣を利かした積り、

『廢しませう〱。雨が降つちや面白くないです。』

と、到頭もと來た道を引返す事となつた。そうして折れ角の小さな八百屋の前へ來ると、友はつか〱と這入つて杉形に盛つた夏蜜柑を指して居る。細君もそれに續く。自分は傍に立つて見て居た。

『夏蜜柑、はい。どうぞお宜しいのを、一つ四錢づゝで御座います。』

八百屋の主人はかう云ひ乍ら、二人の撰擇に任して居た。すると、友は至極應揚な體態で、

『ぢや斯う五つ貰はう。好いかい。』

云ひつゝ、自分の蟇口から銀貨を出して主人に渡した。細君は其夏蜜柑を受取り乍ら、

『困りましたねえ。春(下婢の名)でも連れて來れば宜しかつたのに……』

如何にも困却の體で、五つの果物を思ふ樣冷淡に取扱つて居る。手早く袂へでも收めて了へば好いにと、自分は傍から齒痒く思つて居るのに、一向埒があきさ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うにも見えぬ。友は友で旦那顔で以て平氣に濟して居ると云ふ始末。八百屋の主人も見るに見兼ねたのか、それとも世辭でか、

『小僧を持たせてやりませう。御邸を伺ひまして。』

『はあ、ぢやさうしてお呉れ。』

奥樣の御機嫌に大層愜つたらしい。早速自宅の番地と名前とを洩して、ぞろり八百屋の店頭を出られる。さうして自分も又仕樣事なしに新夫婦の家に伴はれて行くのであつたが、其時分にはもうすつかり雨が止んで居た。

所謂友の邸は其所から二丁とはない程である。二言三言話して居る内に早や御着と云ふ譯、かくと見ると細君は慌て丶格子戸を打開き、

『春――春――』

と此方から聲を掛けるけれども出て來ない。細君は大層不平と見えて、玄關の障子を開けるにも手荒く、後に、友と自分とが居ると云ふ事さへ忘れたやうに、奥へつか〳〵と行つて了つた。

自分は夏蜜柑を食べたい斗りに、今迄辛抱を續けて來たのである。

さて、以前の茶の間に這入ると、煙草より何より、自分は第一にその一袋の御馳走が待遠しくてならぬ。もの丶五分間も經つたかと思つた頃、忽ち玄關に聲あり、耳を濟まして聞く迄もなく、それが八百屋の小僧であると云ふ事は、直に解つた。彼は急しさうに『お待遠さま。』と云つて、置去りにして歸らうとする樣子だつた。

細君はなか〳〵さう自由にはさせぬ。曰く、

『勝手へおまわり。』

小僧はこれもお客樣であるから致方がなく、不承々々に變なからかふやうな返事をして、到頭腰高障子のはまつた勝手口へと、其蜜柑を運んで來た。結局此いざこざの爲に、少くとも三四分間は夏蜜柑を口にする事が後れた譯である。

此小僧が歸ると、入違ひに下婢春が此方へ這入つて來た。彼女は厠に居たのである。その厠と云ふのは、

勝手口から十間餘りも隔つた崖下の極寒い所にあるので、云はゞ此邸の北極に相當して居る。初め此建物には一つの厠が附いて居た斗りだつたのを、それでは差別がないとて、友がこれへ轉居の際強て大屋に迫り、半日の手間で以て、至極簡單な、田舍海道にある便所のやうに、前後に風の吹拔くばかりのを建築させたのがこれである。友及び友の細君は、下婢と比べて數等優れた人種であるやうに、思つて居るに違ひない。さうして下婢の胃袋や大腸には常に恐ろしい黴菌が住んでゞも居るもの丶如く考へて居るらしい。其位自分の身體が大切なら、何故また好んで其樣な下等人種を家の内へ置くのであらう。

チャプ臺が眞中に顯はれた。愈々夏蜜柑の料理が出來るのである。自分は舌の根から湧いて來る唾を飲み込み〳〵、待てば海路の日和と云ふ思ひ。細君は其中の一個を取上げ、ナイフの尖で切口を作らへやうとした一刹那、

『あら…………』

如何にも不思議千萬な奇聲を發した。

『何だね。どうかしたのかい？』

一寸斷つて置くが、此處の家庭は、矢張世間一般の家庭と同樣、夫が妻に對する言葉は比較的ぞんざいであること。併し時に依ると、友が妻を呼ぶのに、『清子さん』など丶、さん付げにする事もあるが、それは餘程どうかしてる時分で通常ではない例であつた。

それはさうと、『あら…………』の説明を忘れてはならぬ。自分もその聲には一種の驚きをし醸たので、早速理由を聞いて見ると、

『此蜜柑の輕い事。』

と云つて、其一個を自分に渡した。さうして他の一個を夫に渡した。成程輕い!! 全く手鞠を持つた程にも思はれぬ。

『此樣な種類のもあるのだらう。むいて御覽。』

友の言葉で細君は再びナイフを取り、厚さ五分斗もあらうと云ふ嚴丈な皮を四分の一程むき取ると、そこには水氣のたつぷりある、生々した袋が並んで居ると

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

思の外、皺だらけの內容なし。人間で云へば骨と皮と云ふ風の哀れな姿なので、自分は少なからず落膽して。一時間餘りも辛抱して、揚句の果が夏蜜柑の骨と皮では、勘定に合つたものではない。細君の不機嫌は云ふ迄もないが、友もこれには流石に無念がり、平生の應揚な所を少しく亂して來た。

『畜生、だまし物を賣りやがつた。こら、皆な同じた。中はほんがら、水氣なんて些少もありやしない！』

『そら御覧なさい。貴郎が彼樣な少さい店でお買ひなさるから、此樣なつまらない物をつかまされるのですわ。一袋だつて食べられやしない事よ。』

自分はそれでも果物に渇して居るので、その一袋を細君に乞ふた。而してそれを熟視ると、全體が綿の如く軟く、本來ならば張切つて居るべき肉が、腐敗したものとより外は鑑定の仕樣がない。試みに自分は口にしたが、味がないのみか非常な苦味である。

『いや、これはまだ熟して居らぬ。熟して居らぬのが長く店晒らしになつたから、此樣な風になつたのでせう。失束でしたなあ。』

かう云つて友の顏を見ると、彼は慌しく細君の方を振返り、

『此樣な物を買つて置いても仕樣がない。お前一寸行つて金を取戾してお出で。』

『否ですよ。其樣な見ともない事は出來やしないわ。』

『何が見とない事があるものか。食へないものは仕方がないぢやないか。』

『ぢや貴郎取戾して入らつしやい。もと〱貴郎が勝手にお錢を出してお買ひなすつたのですもの。』

細君の云ひ分は大分皮肉に亙つて來た。

『假令乃公が買つたにしろ、乃公自身が行けるものかね。けちくさい………』

『貴郎が行けなければ、妾だつて行けないわ。吝嗇坊だと思はれるのが厭だわねえ。』

『そ、そんな事を云はないで行つてお出で。お客を前に置いて、何を愚圖々々して居るのだい？』

友は友で手を變へ品を換えて、自分の責任を免がれ

やうとするけれど、細君はなか〱その手には載らないのである。

『いや〱。どうしても厭です。』

『どうしても？』

『え丶。』

『ぢや捨て丶しまへ。』

『捨てませう。何時でも捨てられます。』

此樣な調子で、皺蜜柑問題が終に夫婦の間に囂々の議論を沸騰させた。併し自分は私に考へた。此家に若し生活に餘裕があるのならば、此樣に紛議を惹起さずに濟んだであらう。して見ると、內實では二十錢の銀貨一つでも此家庭ではなか〱馬鹿に出來ぬ金高であるらしい。其證據には、二人は結句策に窮して、何も知らぬ下婢を引張り出したのである。そうして、今度は主人主婦てふ偉大な命令權を揮つて、この任にあたらしめた。當今の家庭に雇はれて居る下婢の役目には、往々かう云ふ事が多ひ習ひである。本來を云へば、下婢の身になつて迷惑至極、面倒と時間と手數とを掛て他人のした失策の尻拭ひとは甚だ面白からぬ次第であるが、是も主人の命令とあれば是非がない。下婢は唯々としてこの大命を奉じ、復び八百屋の店頭にと持運んだが、その骨と皮との蜜柑には定めし友の家に起つた一段の物語が滿々て居た事であらう。

復命を得る迄友と細君の心配は一通りでないらしかつた。併し自分は左程に心配せぬ。何となれば、この行ひは寧ろ正當の事と云ふべきで、少しも邪曲の點がないからである。あの八百屋は大道の露店ではない。界隈では信用ある一個の商店であらう。その商店の品物を買ひ、後にて之を不可食物として返しに行けばとて、それで何處に恥辱を受くべき理由がある？固より信用ある商店なれば、食ふ事の出來ない品物を出して置く筈がない。若し出て居たとすれば何かの間違ひで、初から故意の商略でないのは明瞭である。自分の友なる人並びに其細君は、何故斯程に心配をするのか。すべて一個の紳士たり又紳士の妻たるものは、五圓以上、若くは一圓以上の金でなければ大切にせぬと云ふ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のがその面目であるか。聊の金錢なれば其所に如何に不正當な事があつても、甘んじてそれを放棄して置くのが、名譽な事とでもなつて居るのであらうか。更に不思議なのは彼等夫婦の量見で、それ程面目と名譽とを貴ぶ位なら、何故彼樣な醜い責任問題は云々し、下婢に迄迷惑をかけるやうな仕儀に及んだのであらう。

自分は決して夏蜜柑を食そこなつた、その腹立まぎれにかう不平を鳴らした譯ではない。實際に感じたのである。

約十分間、下婢は驅足して戻つて來たのであらう。此時息も切々の有樣に、勝手の板間に平伏した。

『どうだつたかへ？　御苦勞樣』

細君のお世辭は却つて下婢をして困却せしめた。

『あの御氣の毒ですが、この蜜柑をお上げ申した人が只今寄席へ行つて居りませんから、歸つて來たら聞いて置きますッて、さう――』

『誰、誰がだ？』と友の聲。

『お内儀さんで御座いませう。』

『不都合な奴だなア。』

『此樣な品物を賣つて法がないぢやありませんか。』

今度は夫妻同盟を以て八百屋攻擊を始めたが、さればとて我衒つて談判の事にあたらむと云ふ勇氣のある樣子は少しもないらしい。自分はもう殆んど座にあるに堪へず、倉皇として此家を辭去つたが、さて其後この問題がどう云ふ風に落着したか、いまだにそれは詳かならねど、多分家内の一紛擾となつた事丈は想像するに難からぬ。かくして自分は終に夏蜜柑を食ふ事が出來ずに了つた。併し自分は思つた。外面ばかり立派なこの夏蜜柑が、丁度見え坊の家へ購はれて行つたのは、寧ろ自然の事ではあるまいか。

▽不幸の雨幸福の雨△

旅商人があつた。ある夏の日の事、赤土の平原を歩いて居ると、俄に白雨が滂沱として降つて來た。商人は天を恨まぬ譯に行かない。荷物はある、外套の用意はなし、彼は大に天を罵つた揚句、不圖ある小さな森を見出して、不取敢そこへ雨宿りをした。すると豫てより待設けて居た惡者一人、これは好い得物と、用意の鐵砲を捧げて狙ひを定め、ずどんと一發旅商人の咴元に放たうとした處、果然彈藥は雨に濕つて居て、其功を奏せず、あはてふためいて遁失せて了つた。旅人は感謝せざるを得なかつた『あゝ天よ。私の爲に幸福な雨を下さいました』（西洋雜誌より）

花を作つてみたくなりました

久田二葉

花笑ひ蝶戯れ、鳥歌ふの時、蜻蛉洲の遠近に散在つて居る新家庭で、清新な趣味を與へる、花を作つて見たくなつたとゆふ動機のいろ〳〵と、花と家庭に就いての新い清い物語を集めて見るのは、乾度多趣味なことであらうと思ふ。自分は此の資料を、昨年來讀者諸君の幾人へ、花の種子を上げた時得たのである。

尤も、今の時に於てソンナ呑氣なことを……と、皆さんからお叱りを受けるかも知れねど、自分は此、國民擧つて戰に酔ひ、花火に見惚れてスリに逢はんとして居る時に、少しでも其の酔ひを醒し、スリに逢はれぬことを願ふので、戰爭關せず焉と、花の趣味を語り家庭へ清新の空氣を注入するに勉むるのである。自然物に對する趣味鼓吹及び之が研究に忙はしいのである。蓋し、これは餘輩の天職と信ずるからである。皆さんにはどうか此の言を呑込んで置いて下さい。

△種子島の新家庭。　母は極く花がスキでしたが父は別にスキと云ふほどでなかッた。私は母に似て、花と來たら何んなものでも大スキで、二人の小供にムシられるのにも懲りず、毎年植へました。昨年友から貰ッた蕣の種子が生えて、奇麗に〳〵咲いてから、今迄花に注意しなかッた父が、フト好きになりました。そこで毎朝椽側へ出て、花を見ながら一家揃ふて茶を汲み、小兒は歌ひながら笑ッて花を數へると新家庭が南海の種子島に生れました。殊に此の頃は、世間話迄花の傍ですると云ふやうになりましたので、今更、花の多趣味にして感化慰藉の大なるのを悟りました。（大隅、鮫島生）

△運動に適した清い趣味。　伍體の弱い私は、銃獵を以て運動の課業として居ましたが、動物虐待防止會の趣旨書を見てから俄かに銃獵のイケぬことを悟りました。その後、鐵亞鈴などで運動の不足を補ふて居ましたが、早晩家庭を作るべき小生は「花と家庭」を拜讀して、遂に花を作るのは趣味が淸くて多く、しかも運動に適して高尚なたるものたるを知り得ましたので……（遠江、熊谷生）

△花が好になりました。　小學校の落成式に、演壇に種々の花が麗々しく生けてあッたので、それに見惚れてから唯何んとなく花が好きになりました。今では、自然物に趣味を持つ人の品位は、高尚で奥床しいと迄、おもふやうになりました。（土佐、下司生）

△腕白時代の趣味。　私は腕白時代に、名も知らぬ草花を、植えたり枯らしたりしてタワいなく樂んで居ましたが、靑年となッてから暫く浮世のことに、頭を突込んで、多少悶きもしました。しかし今では又た始めの樂みの高尚なるを悟りましたので、早速花を作り出しました。（北海道、石丸生）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

△妹が愛する花の感化。　妹が去年から菊を植えて、其の花の咲くのを樂しんで居ることの、如何にも高潔にして清新な趣味だとおもひましたので、自分も今年から花を作ッて、此の樂しみを一家中へ植えやうと思ひます。……　(越後、丸　山　生)

△時が來れば可愛らしく咲く。　私は小兒の時から唯ワケもなく花が好きなので、少しづゝ植えて樂しんで居ます。昨今になッて東京の種子屋から買ッたのは、割合生えぬと確めました。今度、ジキタリス、風蝶草などを蒔きました。時が來れば可愛らしく咲くだらうと、今からそれを樂んで居ます。(遠江、加　藤　生)

△精神上の變動と花。　自分は近年、精神上の變動を與へられてから、亡くなッた父の、花を好きな遺傳性が發現したかと思ふほど、花を作ッてみたくなりました。こうなッて見ると先年から需めて居た高尚な娛樂も這の中にあるやうに思ひますので、更らに果樹を植えてみやうとさへ思ふやうになりました。(堺市、宅　生)

△自然を樂むやうに相成度候。　「花と家庭」を拜讀仕、日頃無性なる小生も、そゞろに草花栽培の趣味を感じ入、此の春から拙者家庭にも是非、二三種の花を植え付、追々自然を樂しみ邪心に遠かるやう相成度候。(上野、蓮　沼　生)

△病と花。　一昨年、病みてより花を愛するやうに相成某農園より種子を取り寄せ、三四度蒔きかへして漸く生やした金盞花、昨年美しく咲き申候。病を慰む爲め花を好きになッた小生、今は、花が何よりの樂に御座候。(東京、唯　生)

我等は、麗かな春に、希望ある太陽の光を浴びて、笑ふ花を見歌ふ鳥の聲に迎へられ、以上の清い家庭の細語を聞いて、暫く浮世の罪惡の中から救はれ、自然の懷に抱かれましやう。(完)

按摩の敵愾心

△妻　貴女が今朝御出勤になると、直ちにあの田舍の弟の所から手紙が參りましてねえ。あのう、十日斗りお宿をして吳れつて、さう云ふのですえ。

△夫　無論何とか理由をこしらへて、駄目だつてさう云つてやつたらうねえ。

△妻　直きに出して置きましたの。あのう、今年小供が疱瘡をして居るから、到底もお宿が出來ませんッて、さう巧く斷つてやつたの。

△夫　な……なに困つた事を云つたねえ、小供の疱瘡――去年斷つた時も矢張疱瘡だつたぢやないか！

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女學生と同乘

吉田抱水

左に見えます樹がくれの紅い華表、それから何々屋とした派手な暖簾も動き出して、私の乘つた汽車は、京都の最う一つ此方、稲荷と云ふ停車場を放れたので厶います。山國の故でせう。今迄晴れ渡つて居ました蒼昊は、急に變つて了ひまして、古綿の様な時雨雲、右に走り左に走る人を見ますと、最うポツリ〳〵落ちてるのでありませう。

「お前さんは京都から……」。

長崎から汽船と汽車に乘り詰めだといふ、二人連が私の前に腰を掛けました女學生に、恁う訊くのでありました。女學生は尻上りの語調で

「唯。左様で厶います。」

「ハア、學校へでも。」「エー。」

「國へお歸りかな。」

二人連は九州訛りのおかしい發音で、恁う重ねて訊きますのを、女學生は笑ひを唇頭に噛みしめた様に、

「エ、草津へ歸りますの。何ですか、鳥度歸れつて云つて來たものですから。」

話は一時途切れました。女學生は、左の袂に手を入れて、金米糖を出しては噛むで居ります。無頓着な男子の私でさへ、不快な感じが起つたのですから、此態度を見ました婦人は、屹度見得ないと眉を顰めましたらう。

窓の外は茶の樹圃でしたが、間もなく竹籔となり、赭土の丘になりました。廻らした私の頸筋の痛くなりました事、瞶つた眼の疲れました事私は退屈しましたから、京都で買つた日の出新聞をながめてますと、

「鳥渡附録をお貸しなすつて。」と手を延ばしたのは女學生で厶います。明てますから私は貸してやりました。新聞も一緒に讀んで了つては、此先樂しみが無くなりますから、其まゝ擱きますると、

「貴方、濟みませんが、暫時拜借……。」と斗り、二三人彼方から、新聞を取つた方が厶いました。女學生は、若い娘が帶を締め乍ら、鏡に向つて居る、挿畫のついた、小説を熱心に讀んで居ります。私は讀みませんでしたが、何れ艶かしい作物でせう。

私は昨夕晩く人の家へ泊つて、少し寢が足りないものですから、昏々と、霎時の間は何が何だか解りませんでしたが、不圖氣が付いて見ますと汽車は今峻しい斷崖の下を通つてるのでした。で山科も大谷も既に過ぎて了つたと聞きました時、私は奈何に吃驚しましたらうか。

「最う長い隧道ですよ。」

女學生が二人連に申すのでした。私は時間を計らうと思ひまして、帶を探ると、膝の上に、整然疊んだ新聞が皆載せてありました。折から鼓膜に響く一聲の汽笛、

「其れ大隧道」。「窓を閉める。」

彼方此方で恁う喚きましたが、汽車は最う鼻も抓めない眞闇々へ入りました。

「母ちやん恐い。」

調子高い子供の叫びに續いて、

「最う直だよ、目々を睡つて。」と母親が宥める。其聲々が何だか異様に聞こえるのです。長々數隧道は、總て濃車を吐いて了ひました。時間を見ますと、約五分經りましたのです。私は恰度、稍發達した智覺をもつて、新世に生れ出た様な心持が致しました。

「マア清い鳰の湖」。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

洒落て云つたのは女學生で厶います。窓外を望みますと、絲の紗を布き展べた樣な琵琶湖は、最う鼻の先に迫つて、其上に散らばつた白帆は、白樺の花瓣が淀んでる樣。然も山城の小雨は近江に霽れて、湖水を隔てた向ふの山々は、悉く銀の冠を頂いたとでも形容しませうか。殘雪、詩だの歌だの俳句だのに、稱へられる殘雪。此眺望は宛で繪です。併し今迄隨分景色を描いた名匠の繪畫を見ましたが、未だ〳〵此湖の殘雪には遠く及ばない樣です。

「比叡ですよ。あの突出た山が。」

女學生は、自分の故郷を慢する樣な口吻で、遙に北の方を指さしました。

二人連も私も見ました。其邊には京都で望んだ比叡山。それから發來なくも三井寺と推量つた古刹。又東に當りまして、際立て高い山。それは伊吹と私は悟つたのでした。途端に一帶の町家は、此佳い景色を散して了ひましたが、汽車は馬場に着いたのです。女學生は家への土產でせう、千枚漬を。二人連は煙草と麵麭とを買ひました。煙草は女學生が、一生懸命に斡旋しましたので。

汽車は軈て出ましたが、此邊は氣も晴れ〴〵とする廣い平原で、東に見える白布を晒してる樣な大河は勢多川で厶いました。女學生は更に南を指しまして

「あの山の鬱然とした所が石山寺ですよ。」

「勢多とは何處かな。」と二人連が顧みますと、堪え切れなくなつたか、ホヽヽヽと笑つて

「勢多ですか、あの河の下流ですが。」

中腰になりまして、指示しましたのです。

「粟津は遂其處。」

河の上流あたりを教へましたが、女學生は益々憶面が厶いません。

「草津の停車場から、石山寺迄、半里位ありますかね。」と背後の方から、八景めぐりらしい夫婦が訊ねました。

「然うですね。瀨多から十八町といふのですから、マア有りますね……お出でなさるのですか。」と此度は長い松並木、南北に通じました街道を示しまして、

「あれが近江街道。あれから行くのですよ歩く方がいくら樂しみですか。妾も國に居た時は、よく參りました。」女學生は愈々氣爽な應答振りで厶います。

女學生の云つた、瀨多の唐橋の側面が見え出しました。と思ひましたが、汽車は容赦なく粗朴な町家へ入りまして、女學生の下りると云ふ草津へ着いたので厶います。

「左樣なら、妾は此處で下車します。」と皆々挨拶しまして、降りた女學生を初として、三人ばかり此客車を辭したものが有りますし、後の客車は、談話の中心を失なつて、奈何に寥しいものでしたか。

私は彼女學生に對しまして、一種の惑に捕まれて居るのです。惡く人磨れて、得て妙齡の婦人に見らるゝ品性の至美、其品性に美を少しも認めないばかりか、將來も危ぶまれる樣な心持がしますのが。――これが所謂社交に巧なもので厶いませうか。すると私は愈々危ぶまれるのです。私は汽車を下りる迄唯此想念に耽りましたが、今以て、社交的女學生――品性の陶冶――と此樣蹤梅式に、此聯想が私の頭を放れません。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

兒童研究の資料

△潔の朝△潔の御馳走△潔の日中△潔の夕方△潔の夜分
△潔の愛犬△潔の禮儀△潔の洒落△潔の愛情△彰の體格
△彰の機嫌△彰の寫眞

宮井岩太郎

内方に二人の稚兒がある。一人は一昨年の正月一人は昨年の七月產れ兒の方は潔と稱へられ弟は彰と呼ばるゝに至たのである。其の命名が潔は潔心をもて互に篤く相愛すべくとの戒に因み、彰は天父の榮光を彰せやうと祈る心を其の儘に用ひたのである。

率や先づ潔のことを誌し次の彰のことを記して嬰兒心の天眞爛熳を顯さん。

（潔の體格）母乳の尠かりし所爲でゝもあらうか、餘り逞しい體格でなく、折々は熱病に患難さることさへあつたが、今日此頃となりては中々に發育もよく、飲食さへ殆んど大人程の御用あるを見れば、素人ながらも先づ結構であらうと喜悦で居る程で。

（潔の朝）昨今は、六時にもならうことなら、早や目を醒し、寢して呉てをるお祖母さんを起して御口に御馳走を要求り、それから追々と言葉のお相手を求める順序となるのである。もうはや潔が起てをるよと、兩親が離室で噂して居ると、御祖母さんは相も變らず、神のめぐみ主イエスの愛との讃美歌を敎へかけるのである。お祖母さんが「か」と音を出せば、潔も「か」と張上ると云ふ樣な風で、一語々々を追ふて幾度も繰返されては居るが、獨りで遣るとついそれが訛ばかりに變化するのである。軈て薄明になつて、障子の格子も朦朧に見えだし掛ると、潔は忽ち一の動議を提出して、兩親の居る室に連れ行よとて父親々々と連呼するのである。寒氣に當まじと、可成辛抱さして居る祖母さんも遂には制し切ずして、竹さん（下女の名）をして兩親の寢室に運ばさるゝのであるが、其の運ばれた時の潔は宛も雀躍するやうに飛んで來て、父親だつこーと外出を強請のである。それから潔は父親を押領して門を出た頃は、小供心にも左方右方の兩道に思案さるゝのである。それは右に縣廳の段梯子、左は廣瀨の牧場と礫を投つべき海へも通ずる道であるからで。日によ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つてはとん〳〵(段上りのこと)との誂もあれば、もう(牛のこと)ぴちやん(石投)のお誂もあり定ては居らぬのである。「とん〳〵」の所へ行くとき、暖かな日でゝもあらうことなら、父親を先導にして獨で上りを繰返し、なんのことはなく切りに嬉しがる。「もう」の所へ運ばれた時は、自分でもう〳〵と呼び、牛が甘そうに朝食を遣つて居るを見て、あゝ甘味いと何日も同じ様に同情の聲を放つのである。然し時によると牛の方が大聲でウモーと遣ると、其の時は忽ち歸宅々々と言ふて恐怖がる。牛の見物をすますと、次がかの礫投で、必らずターツ〳〵と言ふて、小石二個を貰つて海邊より石投遊びに興を湧かすのである。さうなると身を切る様な風が吹うが、少々雨が降うが、更にお構ひなしに霎時は繼續するのである。そう云ふ様な娯樂が濟んだら、それから朝餐にと歸宅を請求しかける。歸宅するや否さんざんに運動後のことゝて、御飯を母親から供給せらるゝ時は、想像せられぬ程の歡樂を顯はすのである。

(潔の御馳走) お粥に梅干と漬物、お肴などは物に依ては却て嫌ふ方にて、牛肉様のものは大好物ではないらしい。潔や歸宅だら、まゝとそれから肴とかと問ふと、寧ろ漬物と答ふる位である。其又漬物は衛生上如何やと思へど、第一の好物らしいので、却て斷禁するは不可であらうと、極々少々切きざんで御飯に散て食さして居るが、什麽も是々と言はぬ計りに歡迎するのには、却て貧家の幸福とでも言はうか。それに間食のお誂物がウモー(燒芋)とミー(蜜柑)とである。それが、可笑しなことには必らず兩方の手に握らねば承知せぬ事で、何物もターツ〳〵と二個を要求してやまぬ。それ以上に掛ては無慾な者で、誰れにでもさつさと賦與てしまうのである。

(潔の日中) 彰を負ふたる竹に連られ、潔はよい〳〵の聲を發して例の石投に行たり、隣所の金魚甕の所へ行てはピーピーと言ふて金魚を相手の御慰み、あるは又パパ(喫煙家)と云ふて平素御愛顧を受けて居る家に訪問たり、舜さんと言て同年のお友だちを

からかふたりしてから、什麼なり斯樣なり父親の歸宅前迄屋外遊山を遣て居たのである。

《潔の夕方》父親の役所から歸宅るを俟かねて居たと云ふ樣な風で、何日でも靴音がすると遽しう歡迎に來て、切りにアイ〳〵と挨拶して、それから父親の橫に座て、家族と共に夕餐を濟ますと、容赦も糸瓜もあつた者じやない、直に父親に外出を勸めてダイテ〳〵ときめ込む。是にはとんと防禦策はないので、何日も勝利を潔に占有せられ潔の馬となつて今度は大抵チンチと云ふて片原町の淺の海洋服店の餝り人形のある所へ駿ませらるゝのである。其所へ到着すると、直失敬と明晰な句

號外來!(其目の如何に大きく開くかを見よ)

調で張上て、右の手で西洋挨拶を二三度繰返すのである。霎時は瞳孔を据て專念一意に見張て居が、今度は又チンチと云ふて右向の舶來屋の西洋人形や犬形の入て居るグラースボックスの前に立たしめらるゝのである。是も前同樣霎時注視して居るが、是が濟んだら今度は中川時計店に陳列しある時計人形のある所へ御用があつて、其人形が機械作用にて上下して居るのを、自分も仝じ樣に飛上て歡樂するのである。それから一二の玩弄屋へ連れて行かれて、なんのかんのとの澤山のお饒舌を聞かされ折々は電信局に寄らされてから御歸宅になるのが例である。これが潔の夕方で。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（潔の夜分）歸宅すると、大抵は七時頃であつて、母親も竹も一圍て縫仕事に取掛て居ると云ふ塲合、母親たん〳〵祖母たん〳〵と大呼して歸宅を知らせ、急いで仕事塲に突入するのである。さう突入した以上は中々以て仕事などはさす所でない、自分獨りの天下だと云ふ樣な意氣で四邊を騒がすので、それの鎭壓策ともならふと云ふ所から、大抵竹さんに連れられて形容唱歌を演しさゝれるである。

竹さんが「さあぼろあん云ひますよ。」とて、『雀々、お宿は何所じや、チユチウチユ々々々、此方で此座る、御翁さんよくお出來、御馳走致しましよ。お茶にお菓子、お土産に葛籠、左樣なら歸りましよ。御機嫌宜う來年の春は、又々參じましよ。』と岡山孤兒院にての練習歌を謳ふて一々形容を施すと、潔はクク〳〵と口拍子をとつて眞似るのが此頃では余程上手になつた。それが濟むと今度は『蜻蛉や蜻蛉、宿れや蜻蛉、蜻蛉の生活のを見渡せば、空遙遙と極もなし。綺麗な羽で、風をば切りて、飛行べき方位を、確に定め、飛よや蜻蛉、何邊迄も。』や、または『ぼつぽ、ぼうぼつぽと飛んで來い。お倉の屋根から飛んで來い。お豆をやるから直ぐ食べよ。食べて直ぐ歸ね直ぐ歸ねや。はぼつぽ、はぼつぽ。』などを謳ふと最とも面白がつて、皆の笑ひに益々興がるのである。其内に八時頃になり、段々眠睡げに見えると、お寢所に入れるのであるが、さー其所に納られやうものなら、直ぐ頑是なく眠て了ふ。尤もその寢所の前には大抵一二の御慰品を置いて置くので。

（潔の愛犬）犬に對しては恐怖い樣で、好な樣な態度をなすのであるが、內方界隈に養育れて居る松と云ふ男犬は最早老犬ではあるが、余程温順い質にて、界隈の小供の愛嬌者となつて居のである。潔も此の松をマーと呼んで、一つの玩弄として居る。「マーが來たよ。」と知らせば、何を捨ても走り來り、ヤヤと押す樣な態をして、やるべき肴を強請のである。此の犬が余程贅澤なもので肴の外は喰はないのみならず不味い所などは殘して置く。そこで、折々御愛相に乏しひ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のでスーと歸つて仕舞ふと、潔はなんだか今尙少しは居れば良いがといふ樣な名殘惜げな顏をする。途中でゞも松が見えたなら喜んで、マー〳〵と連呼して手招きをし、擦り寄樣にして來る松を撫でゝ、ヤーヤーと戯れるのである。此犬も小供衆に可愛がられるので幸福ではある樣だが、御老體の事故時には有難迷惑であらうと思ふて氣の毒でならぬ。

（潔の禮儀）潔は内方の出入には皆に向ふて、アイと失敬との和洋の兩挨拶をする事に定つて居て、家族が挨拶した者には一々慇懃に挨拶するので、應接者には非常に可愛がられるのである。それから御飯の時は家族の祈禱に連れて世話をし、皆に渡してから最後に自分が正座に就くのである。それから外出の時は自分の分も冠るが、父親の帽子を持て來て之を手渡し、若しも父親が無帽の儘でゞも出やうものなら、パツポ〳〵と注意がまし〳〵云ふのである。それから外の所なれば父親の後を慕ふが、教會と縣廳のときは只玄關で見送つて居る。

（潔の洒落）考へて見れば別に制止たこともないからでもあるが、よく遣る洒落の本でもなんでも構はず、紙でさへあれば殊に白い所を好てべた〳〵と筆で墨を塗付るを一の愉快として、尠からず父親に迷惑を蒙らせて居ること、時々靴を履た儘でお家に上て知らぬ顏の半兵衛をきめて居る事である。それから洒落と言はゞ言へ爰に定文句の樣に言ふことは、物の數をターッと云ふ事である。折には二以上の物を意味して言ふ程ではあるが、恰も其のターッと云ふた時は大抵實際二個ある場合が多いのである。そこから平素に感じて居るのは一と云ふのは物の絶對の大原因ではあるが、區別の基數となりては二である。即ち天と地、男と女、右と左と云ふ樣な例で、萬事一は哀を含み寂を感ぜしむるも、二は家庭をなすの基礎社會の單位であるとの事である。潔がターッと云ふた時に注意して邊を見ると大抵一の親犬に一の子犬が追從て居るとか、お月さんの傍に一の星が輝いて居るとかを發見するので、餘程興味ある事と思ふて居る。それから又奇體に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も好て居のは音樂である。他の物の經驗はないが、ヲルガンとかピヤノとかの音色を聽かして居れば、それは〳〵アツパ顏して有頂天になつて聽きとれたのである。何時ぞや或る商店に自動洋琴が鳴て居たのを聽かして居たら、凡そ三十分間程呼吸をも忍んで一語も發せず、靜粛に聽て居たには、父親もほと〳〵感心して此樣な立派な聽人は外にあるまい彈奏者が居たら十二分の感謝を表するであらふと云つた程である。それから尚一つは名に因む譯でもあるまいが、潔は隨分潔癖であるらしい。疊に水でも覆れた時は、直に手拭を持來て自分で拭取のである。又途中で倒れでもした時、手や着物に附いた土などを掃落す迄は、バイ〳〵と言ふて少しも其所を動かぬのである。これでは什麼やら親の願ふ潔になりそうな所が視える。

（潔の愛情）色々な所に顯はるゝ樣ではあるが、今其一二を擧れば、自分より以下と思ふ小供を見ると、チンチと云ひて何か物でも持て居ると、其の小供に與へて更に未練がらぬのである。それから弟彰をアーと呼び、チンチと呼んで頭や顏を擦たり、または接吻して居る事がある。

さて、これからは弟彰の事を書き表はしてみたいと思ふが、何を云ふてもまだ八ケ月になつた斗りなれば、是と云ふて書留る事柄もない。併し觀察に依ては亦面白き節もあれば、其の數項を誌さんとす。

（彰の體格）兄潔の體質は全く壯健ならぬに引替て、彰の體格ときたらそれは壯大で、まだ量目には懸てはみないが、確に一貫目はあらふと思ふて居る。色は幼兒にも似合はず小黑いが、肌理の良い事と言たら至で清水燒に觸る樣である。何樣結構な體質で、今迄にも一回も熱の出た事もなければ、醫師の手に掛けた事もない。

（彰の機嫌）從て機嫌の寔に良い兒で、何時も鷹揚に莞爾として居る。はや人の顏を見別てか、お傅婢役の竹さんを慕ふのである。朝は五時頃位から母親を起し、暫時明燈の傍でから〳〵などのお玩弄にて遊ばさるゝのである。其の間もなにかグググと云ふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、自分の手を吸つてをり、夜の引明頃となると、竹さんに負れて室外にてググと歡喜がつて居るのである。何方から見ても餘程此の彰は樂天主義に出來上て居るらしい。

（彰の寫眞）昨年十二月二十五日クリスマス紀念として寫したのが始であつて、潔と共に寫て居る有樣を見るに、潔は宛も神經家相で、音樂とか畫學とかに適する樣であるが、彰の方は嚴丈作り畏れ多くも基督の幼時を聯想さるのである。

序に誌す。兩兒のある家庭は兩親と一人の祖母さんと、竹さんに六人ではあれど名古屋の女學校に一人の叔母さんと、神戸に一人の叔父さんと一人の叔母さんを控ふべき組織なのである。此の家庭の信仰は基督教にて、大抵毎日一度團欒の祈禱會は催さるゝのである。敬意に基ひて兩兒は神の預け賜ふ者と信じ、可成人たるの人格を忘れて取扱ふ事なきに注意をなせる。「嬰兒の如くならずば天國に入る能はじ。」との箴言を服膺して俱に偕に天眞爛熳たらんことを努めつゝある。

△寄贈雜誌新聞

△少年日露戰爭記（一號）矢張郁文舍から出た面白い雜誌。△戰捷繪葉書。四谷の信友社から出たもの、美しく出來て居る。△國の敎（九十五號）△學友（八十二號）△帝國文學（十卷三）△少年（六號）△成功（四卷一）△をんな（四卷三）△家庭之友（一卷十二）△少年日露戰爭記（一號）△中學科講義錄一學年（十七號）△新生命（二卷一號）△佛敎婦人（四卷三）△常盤（七卷三）△社會主義（八年五號）△横濱文學（二卷二）△求道（一卷二）△安路波（四號）△新人（五卷三）△二十世紀婦人（一卷二號）△横濱（四號）△佛敎文藝（一號）△婦人新報（八十二號）△直言（三號）△あはれみ（一號）△婦女新聞（毎號）△大阪タイムス（毎號）△評論之評論（毎號）△家庭敎育新聞（毎號）△割烹新聞（毎號）△修養（一號）△牟婁新聞（毎號）△家庭新聞（毎號）△戰時家庭新聞（毎號）△田舍交報（毎號）△佐賀家庭新聞（毎號）＝（以上一三月中）

△嫁に行く娘への餞別

「女子は男子に服從すべきものなるか」と題せる村井知至氏の（第三回社會主義婦人講演）演說中に左の語あり。曰く。

「私には娘が澤山ある。さうして娘達を緣付ける時に遣はす只一の餞別は、「何時でも歸つて來い。」なる一言である。かう云つて送つてやれば、男子に侮蔑せられても默つて居るやうな、意久地のない嫁にはならぬであらう。云々

内職の事

軍國の婦人が軍國の經濟を講じ、軍資恤兵の料を作らんが爲めに、結髪を廢するとか、白粉を付けぬとか、甚しいのは入浴を減ずるなどと云ふ極端な方法を案出した人があるが、記者は此上に今一歩を進めて、積極的の方面に目を付けたならばどうであろうと思ふ。節儉――それは一つの美德たるを失はないが、併し又節約一方に固ると云ふのも甚だ愚な話。如何勉强して不自由して入湯を減じ白粉を廢したからとて、家々の細君が例の如くぶら／＼と遊んで居たならばどうであらう。得る所は身體の健康を害する事と、婦人性來の美點を害する事との外に、何か得る處があるであらうか。又假令大金を軍資の內へ義捐したからとて、實際自分の額に汗した結果でない以上、左程に誇る事も名譽がる事もないであらう。此際內にあつて國力を充實せしむべき一つの策として、記者は大に細君や娘方の內職を勵めるものである。尤も內職と云つても、マッ

チの箱はりだの、煙草捲などに至つては少々考へ物で、今少し體裁の好い趣味の深い、云はゞ美術的思想にも幾分適合すると云ふやうな物を選んで貰ひたい。

　右等の考へから、記者は過般ある女の美術學校に其校長を訪ひ、種々職業に就ての話を聞いて見たが、今日の處ではまづ造花、編物、次に刺繡と云つたやうな順序に需用があるとの事であつた。此外に日本畫、西洋畫などの科目はあつても、これを志さすと云ふには非常の年月を要し、且つ天才のない通常人には寧ろ迂たるを免かれぬ。頭から內職と云ふ以上は、可成的それを成效するに日子のかゝらぬものでなければならぬと同時に、また一方には需用の道が開けて居らねばならぬ。校長の話に依ると此點では造花が第一等で、當に國內のみならず、汎く海外へも輸出して居る。そうして現に此道の先登などは、自宅に數十人の細君や娘を集めて、盛んに製作して居ると云ふ。併し、其一方に固つて了つて丸で職工同樣と云ふのも、感心は出來ぬが、記者の本意は何もかやうにして迄錢儲けに出精

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

せよとは申さない。只此際無駄な時間があるならば內職の方へ費して、節儉以外積極的の方面に力を盡して欲しのである。

我が愛讀者諸姉の間には、既にもうこの點に着目して、實行して居る向もある事であらう。そうして記者などよりは餘程此等の事に明るい人が澤山あらう。で其等の人には細に說明の必要がない譯だが、此造花編物刺繡なぞと云ふ手藝は甚だ容易なもので、特に指の頭に巧妙な働きを有して居る日本婦人には、何の苦もなく其成効を見る事が出來る。西洋人が我國婦人の刺繡に對する針尖の働振を見て驚いたとあるは無理もない。全く先天的に伎倆が備つて居ると云つても好いであらう。大抵の手藝學校の卒業期は先づ二年とあるが定まりであるが、それは奥の奥まで熟練しやうと云ふ人に要する日子で、普通內職として速成を期する考へならば、三四ヶ月もかゝれば充分である。記者が談じた校長などは、三ヶ月で一科を仕上げ、一日に三十錢以上の賃錢をとらせて見せますと云つて威張つて居た位。

さてこれを始めるに就いて、多少の器具を要する事は無論であるが、それでも極々僅かなもので、それが爲めに手が出せぬと云ふやうな心配は決してない。又これを敎へる人も、隨分世の中には澤山あり、強ち學校へ行かずとも、これを需むれば即ち得られむ。記者の憂うる所は、器具の金高や、敎師又は手引の有無に非らずして、我國の婦人が果して貴族的の虛榮心を斷然打破つて了ふ勇氣があるや否やの問題である。內職を賤しむ事は不正當の見解であると云ふ事が、今日の細君達の頭にまだ充分に這入つて居らぬ。働もすると小貴族に眞似ねて、只何もせず、ぶら／＼して居る事を以て、非常に自分の地位を擧げ得たやうに心得て居る。何と云ふ陋見であらう。

記者は此事に就いて今少しく書きたいのであるが、餘白がない故、又折を見て揭げる事にしやう。若し內職の事で相談のある向は遠慮なく質問ありて不苦。

吾婦人

有本次郎

婦人と云ふと、直ちに人の母と云ふことを聯想する、が、其の人の母たる資格に就いて大いに要求がある。婦人は其の容姿に於て、其の性質に於て、花の如く美しく、優しく、情に於て濃やかに、注意の周密なるを以て其の特性としてある。けれども、素婦人の性質は極めて柔順なるものなるだけに、時としては其の教育の不完全と、境遇の如何に依つて過度の神經質に失するものなれば、婦人に於ては自から力めて注意すべきことで、殊に婦人の性質が、其の子供に注がれることの、比較的男子よりも多いものであるから、若し其の母たる人の性質不健全にして、病身、或ひは無教育なる時は、到底健全なる國民を造り爲すことが出來ぬ。と云つて、お轉婆は決して婦人の名譽では無い。婦人の特性は花の如く美しく、雪の如く浄らかなるを以て月の如き光りあるものである。

から、人の母——則ち人の細君たるには、其の智識に於て、其の學問に於て、又體育上に於ても、十分子供を教育するだけの資格を有し、良人を慰籍し、自からも勉勵と快樂を求めなければならぬ。が、若し、其の人の不幸にして絶へず病床に在りて、不快なる顔色と、苦痛の唸き聲を子供に見聞させる時は、自然子供の發達すべき活氣を抑壓するから、知らず識らずの中にツイ不活潑のものに成らしめ、又良人に對しては家庭第一の慰籍を缺くから、何時か家庭に温情と云ふものが湧かなくなる。隨つて双互の間に不愉快を感じ、遂に家庭の平和を破り、世間に聞かれまじき夫婦喧嘩を爲すが如きは、幼兒の教育上に多大の悪影響を及ぼすもので、人の親たるの威信を損する原因である。

で、婦人は全體が情の人であるから、成るべく頭を冷靜にすべく注意が肝要である。先づ注意の順序として、理化學の素養が十分なければならぬ。それは自個の注意のみに止まらず、子供の教育のためには缺くべからざる要素である。假令ば子供を伴なつて電氣鐵道

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に乗つた際に、子供から其の運轉の說明を要求された場合に於て、母たる人が說明を與へなかつたなら、子供の失望は如何ばかりであらうか、其れと同時に親の威信と云ふものも失はなければならぬ。人の母として權利を振ふべき其の人が、一朝親の威信と云ふものが無かつたなら、其の人の不幸は云ふまでも無く、肝心の子供は如何なる運命を以て社會に立つであらうか、母たる人の大いに考へなければならぬことだ。

其れから在來の諸禮式も、チョッと考へた處で、一向に塡らないやうなものだけれど、是れが又大いに學ぶべき價値がある。と云ふのは、何れも旨く機械的に出來てあるから、婦人の尤も熱し易き頭腦は、機械的

萬歲の聲（滿部の士女皆熱狂す）

の動作を學ぶ中に、何時か冷靜に傾いて來るから、深く味つて見ると中々趣味のあるものだ。中にも殊に茶の湯は禪味があつて、極めて趣味に富んでゐる。これは單にお茶を呑むと云ふのが趣意ではない。もの丶順序を明かにすると云ふのが主であるのだ。で、或る人は、西洋人は非常にもの丶順序が正しい。子供でも物の始末は順序を以てするから、一遍片付けたものを取出すに決して方々を探し散らかすと云ふとが無いと云つたが、我日本人もモウ少し一般に茶道を研究してあつたなら、順序の正確は必ず西洋人には讓らないのである。右の手に取るべきものは、否應なく右にしなければ成らない譯になつてゐるのだから、假令ば物を日八分に捧げると云ふのは、一には食物類

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を口の下にするのは、客に對して無禮でもあり、亦一には足許の克く見へるためである。物を持つて足許が見えなくては、兎角怪我の仕易いものだから、其の用意に高く捧げるのである。

渾て斯ういふ風に、微細な處にまで注意が往渡つてゐるのが即ち茶道の妙なる處で、深く研究すればするほど細く、箒の掃方から雑巾の拭方までも説明してあるのみならず、料理法から建築法——園藝等に至るまで、人の生活上に必要なることは細大洩らさず研究が出來るのである。

次に婦人に欽くべからざるものは裁縫だ。これは強ち自から針を持つことの必要は無くとも、縫方、裁方の善悪から、自分の體に合はせるまでの指圖をする心得が無くてはならぬ、若しそれだけの心得が無くて、着物は一切他人任せに、仕立の善悪も見分けるほどの智識が無かつたなら、自然友達の侮蔑を受け、召使等の不信を招き、嫁しては姑小姑に疎まれるなど其の影響する處は極めて重大である。

何事に依らず、常に事の破滅は重大事件より來たることは甚だ稀であつて、些細な、聊かも目に止まらぬほどの事がだん〳〵に大きくなつては、毎も蟻の穴から淵が出來るのである。であるから、他人の行爲に就いて、少くも短處と認めらるゝものがあるなら、自身にも必らず他人に見出さるゝ短處があるに違ひないから、自から他人の短處を見て我を省みなければならない。其れと同時に、尤も婦人に要するのは同情の念である。假令ば奉公人に對する時なども、主人と云ひ、奉公人と云ふも、素より同じ人類である、が、何故に自分は奉公人を使ふかと云ふことを考へなければならぬ。而して人を使ふ自身の境遇に感謝するのだ。すると自然他人に對する同情心が起るものである。

モ一ツ婦人に要するには料理法だ。これは強ち贅澤をするのでは無い。普通のものを普通のものより快よく喰はれるやうにするのだ。茶道に於ても料理法を設けてあるのは、既に其の必要を認めたので、古來女兒の雛祭りなどにも、遊戯の傍らに献立てや其の他の諸

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

禮式を心得させたるが如きは、尤も進歩した家庭教育である。

殊に吾人の常に慨嘆せるは男女の交際法である。彼の茶道の起りたる動機は知らぬが、或ひは或る道義上の反動ではあるまいか。其の起りたる當時に於ては、モハヤ男女七歳にして席を同うせずなどの、極めて愚論たることを知覺した痕跡が、瞭々彼の茶道の上に見はれてゐる。けれども惜いことには、是を講ずる――所謂宗匠なるもの丶、未だ頑冥固陋にして其れを知るの明なく、徒らに古人の繩墨に依り、茶道を講ずるにあらずして弄し來たつたので、折角開展されかゝつた男女の交際法は、依然として其の門戸を閉鎖されて了つたのだ、が、男女の間は成るべく親しく交際した方が可い。今日まで此の交際が餘り嚴格過ぎた爲に、却つて色々な弊害を生じたのであつた。と云ふのは、男性は男性、女性は女性と云ふやうに、お互ひに離隔してゐては、何時までも兩方に緻密なる性格を知ることが出來ぬ。其れで百年の苦樂を共に仕やうと云ふのだから、随分危險極まるものだ。丁度富籤を引くやうなもので、旨く當れば一攫萬金の僥倖を得ることが出來るが、一朝外れたが最期、一生悲慘に終らなければならぬ。

然るに今日尚この男女の交際法に就いて、我社會は全然開放を許さぬ。誠に遺憾千萬の次第と云ふべし。甚だしきは、常に社會の木鐸を以て自から任ずる新聞紙に於てすら、嚮頃女學生一部の品行上に就いて、陋劣極まる毒筆を弄して纖弱なる個人の私行を發いたものさへあつた。又此頃或る婦人專門の新聞紙にして、婦人の結婚に就いて不可能を説くものもあるが、若しを過ること無くんば幸ひと云はんも、彼等の失言はツヒ世に過ちたるを遁れぬであらう。

吾婦人は尤も偉大なる人の母たらんことを望む。

瓦斯の應用と臺所

一般の家庭にはまだ精神的の革命が行はれて居ない位であるのに、科學の進歩は容赦なく種々の方面に應用され、頑冥な舊式思想がみつしりと立籠めて居る華族などの家の臺所に、果然新時代の產物たる瓦斯竈なにかの出顯を見るやうな事が往々あるのは、まことに可笑しい現象とも云ふべきである。

實に輓近種々科學の應用が家庭の間に行はれたが、この瓦斯の利用ほど偉大な功を奏したものはないであらう。元來瓦斯なるものは光、熱、動力――かう三方面に用ゆる事が出來て、清潔、安全、輕便、經濟の四德を具備して居る。外國では大都市以外、聊かの人口を有する小都會にあつても、貴賤の別なくこれを炊事用として、文明の恩澤に浴して居ないのはない我東京の瓦斯事業は市の經營になつて明治七年に始めて顯はれたのだが、十八年頃に今の瓦斯會社が拂下げをして貰つて以來、終に今日の發達を見るに至つた譯である。

先づ瓦斯力を應用すべき器具の普通なるものを舉げると、第一に竈、七輪、煮焼の道具で、次が燭臺、釣ランプ、點火用器(今の煙草盆の代り)それから雜具に至ると、菓子燒、鏝、熨斗などの類で、又一段高價の物は、西洋料理器、西洋風呂、ストーブ――斯樣なものであらう。

然らば其消費代價は如何にと云ふに、同會社の表に依ると、竈の一升焚が七厘七毛とあり、二升焚で一錢三厘三毛とある。其他の器具に用ゆるも、すべて燭光の度合と、時間とに依つて多少の差があるが、兎に角瓦斯を臺所に應用して第一に心地のよいのは、四邊が綺麗に出來る事である。あのゴム管一本とマッチとさへあれば、何にでも用ひられて、少しも手が入らぬ。水道が引けてから慥に下婢一人は省けると云ふ評判だが、更にそれへ瓦斯を据付たならば、下婢など雇ふ必要が全くなくなるのであらう。

日本在來の炊事場は甚だ美術的でない。竈に薪、十能、火吹竹、箸、消炭壺、灰桶、御飯を一寸焚くのに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さへ、これ丈の雜具が必要である。昔時は『臙脂の附いたる火吹竹』などと歌つて、意氣がつたものだが、思へば隨分氣の長い話である。總て昔時の臺所は飯事のやうな具合で、時間の經濟などの點には一向考へが及んで居らなかつたらしい。萬事に迅速を貴び、輕便を願ふ今日の臺所には是非瓦斯の必要を感ずる。ランプの如きものでも、漸次これを廢して、火事などの起らぬ安全な道に就かねばならぬ。

併しかゝる輕便な文明の利器に接しても、これを社會一般の用に供する事の出來ぬのは遺憾千萬の事である。それと云ふのは、瓦斯据付に對して可也の金高を要するからで、中等以下の者には願ふてもその恩澤に浴する事が出來ぬ。獨り金のある上流社會の家庭のみが、この恩澤を恣に出來る譯で、甚だ公平を欠いた次第。金力の權威は實に何れの處へも顯はれて害をなすものである。

尙ほこれに就いて今少しく明細に書いたのであつたが、紙面の都合でこゝにやむを得ず筆を擱いた。

貴婦人の繃帯捲

此間赤十字社病院で繃帯捲きを盛んにやつた時、東京中の貴婦家の令夫人、貴族の奥方などが續々と詰掛けて、赤心の程を顯はし、中には椅子にも凭らず、襷掛けの甲斐々々しい姿で、其苦勞のない白い手を働かせたと云ふので、大變な美談となつたらしかつたが、丁度其時記者は澁谷あたりへ散歩して病院の前を通り掛り其門内門外に馬車と人力車とで通路がない位になつて居るのを見受けた。申す迄もなくその澤山な車馬は貴婦人を乘せて歸邸する役目で、待つて居る仲間であつただらうが、記者にとつては其瞬間から非常に有難味をそがれたやうな氣がしたのである。所が其後耳にする所に依ると、多くの貴婦人達はかの繃帯捲きに數日間病院内で用ゐる爲、俄かに白木屋の吳服店へ命じて羽二重の白衣を製らせたとある。そうして其價が四十圓！ 何と云ふ矛盾であらう。彼等は果して其數日間に四十圓と云ふ金高の白木綿を繃帯に捲いであらうか。僞善、虚飾、暗愚、不當から青臭い空氣の中に住つて機械的に精神を用ひて居る連中には、どんな矛盾も拉若も平氣である。若し彼等にして充分承知して居て此擧に出たとすれば、其浮華なる心事眞に惡むべく、又此擧が不用意の間に出でたとすれば、其愚昧にして明盲目なる所、寧ろ憫然に堪へぬ次第。記者は此に至つて彼等に對する尊敬心の全部分を失つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

編輯便り

流行雜誌の運命 此頃書肆の店頭を覗て見ると、一番上席へ並べられた雜誌が悉く戰爭物です。品類を分けたら三十種もありませうが、其内でも大書肆から出版したものは二十萬册も賣れたとあります。盛なりと謂つべし。併し冷熱の劇しい我國民には永久にこの流行が持續しやうとは思はれない。聞く所に依ると、昨今ぼつ／＼眞面目な雜誌が賣出して來たさうです。流行に從つて主義を變ぜぬ哀れな小さい雜誌でも、矢張人間の裏心ではこれを捨て切れぬと見えます。

赤坂の高田稲子君 より「家庭雜誌を讀んだお陰を以て因循姑息で有つた私も、今では最も快活な、人前でもぢ／＼するやうな事のない女となり云々」と申越され、誠に編輯者に百倍の勇氣を與へました。あの手紙は堺氏へも見せます。

武が濟水金次郎氏 よりの來書に「可愛ゆき妻に一年の暇を與へ、内職實行の爲に手藝學校の造花科に入れた」とありました。其お心掛けや眞に到れり盡せり。願くば昨今の内職の模樣を承りたし。

野崎秋村君へ 由分社から「戰爭美談」が出たのが氣に喰はぬとの御言葉、一應御尤に存じます。併し家庭雜誌は決してこれが爲に害されません。右は一に營業の方面に屬する問題ですから、どうか其積りで願ひます。

讀者諸君へお詫 甚だ恐縮ながら今回はとう／＼「新婚の姪に與ふる書」の續稿が間にあひませぬ。平民新聞が發賣停止を食ふやら、少々風を引いて頭痛がするやら、何やら斯やらで終に此始末、何卒よろしく讀者諸君に御詫びを願ひます（三月廿八日夜）

渚山兄　　枯川生

家庭通信 編輯者は此度改めて愛讀者諸氏に要求します。それは家庭の通信です。折にふれて面白き無邪氣な、又は教訓になるやうな記事を送つて下さい。假令ば家内中で花見に行つた時の記事とか小供の産れた時の模樣、其他結婚、生活狀態、旅行、何でも材料はありませう。本誌は次號からこの一欄を設けて、一特色を發揮させます。

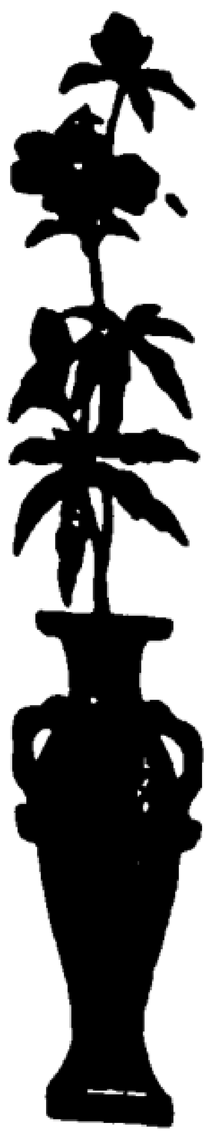
（編輯に關する御手紙はすべて小生宛に願ひます。渚山生）

花の友へ ◉皆さんへ花の栽培法などを一片の紙に刷つて上げる筈でしたが、原稿を活版屋が紛失しましたので、種子丈け送りました。で、皆さんはアノ珍らしくない花の種子をカモチヤにして下さい。尤も、本誌第一卷九號に語つたこと丈けで可也に育てられると信じて居ますが。

◉皆さんの中で「珍らしいもののみ」と但し書をつけられた方も御座いましたが、あゝいふ方には我が選り上げた種子で頗る不滿足でしたらう。それは我慢して下さい。他の初めて花の趣味を持つ人の爲に。

◉けれども余は、一面、花の研究をやり居るから、毎年研究濟みの種子や苗を諸君に差上げて、未研究の植物栽培に着手するから、年々變つた花の種子を少しづゝ、皆さんの家庭へ供給します。それから種子を與れとハガキでよこされた方があつたので、送致外の郵券を送られた方へは別に御返しゝなかつたから御承知を願ひます。

◉花に就ての質問はドンナことでも聞いて下さい。面白い答が出來れば誌上へも載せます。余の住所姓名は「石川縣鶴來町タ九九、久田二葉」です。匆々不一



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

自然を愛し樂しきホームを得るものは園藝です園藝は身體が强壯になつて新鮮なお料理が食へて美しい花が見えてそして最も經濟です

内外**蔬菜果樹花卉**種子苗木**類** 說明案内書往復葉書にて申込みなさい直ちに送ります

目下播種移植に適當な品澤山あります　◎京都七條吉祥院　贊育園

花と苺

三瀬眞若著、飯田雄太郎畫

三色版、寫眞版七葉入

本書は、著者が家庭園藝の普及を望むの餘、其感想と經驗とを記したものです。どうぞ御一讀を願ひます。

四六版美本　紙數百頁

正價金四拾錢　郵稅金四錢

札幌 **興農園** 發行

東京大販賣店賞華房大傳馬鹽町

故德永規矩遺稿

西鎮、中山忠恕、海老名彈正、内村鑑三序、

逆境の恩寵

定價四十錢

事業には失敗し十六年間病床にあり貧苦と失意の中より無限の慰安と富と成功とを收め得たる基督信徒故德永規矩氏が臨終三週前に脫稿したる懺悔錄なり不朽の生命と眞正の成功を渴望する者は來りて此書を繙け必ず得る事あらん

田村直臣君著

母と子供

定價十五錢

郵稅不要

發兌　東京京橋區尾張町　**警醒社書店**

電話本局八八八番
一三八五番
東京神田區駿河臺鈴木町二番地（御茶水橋畔）
東洋内科醫院
院長　醫學士　高田畊安
診察　毎日午前但日曜日及大祭日休業、入院診斷後隨時應需、火木土曜、窮者施診○病室增設落成

神奈川縣相州高座郡茅ヶ崎海濱
（停車塲所在）
南湖院
副院長　醫學得業士　林止
診察　院長出診土曜日午後、副院長診察毎日午前、但日曜日大祭日休業、入院診斷後隨時應需、土曜日午後施診

東京麴町區三番町三十番地
（市ヶ谷停車塲附近）
高田病院施診所
主任　醫學士　松田三彌
診察　毎日午前、但日曜大祭日休業、窮者ニ施診ノ上其病名及養生法ヲ示シ處方箋ヲ與フ○往診應需

外科皮膚病
梅毒痔痳外科的婦人科尿道器械的療法
診察　午前九時より十二時まで
東京　新橋際出雲橋　加藤病院
院長　獨國醫學士　加藤時次郎
分院　横濱神奈川臺○火木土午後三時至六時
小田原海岸　毎月曜午前中

帝國貯蓄銀行
銀座一丁目河岸通り
（電話　新橋）八一六番
二八〇八番

飯倉四ツ辻　飯倉支店　電話新橋一五七四番
赤坂表一丁目　赤坂支店　電話新橋二〇六八番
四谷大通り　四谷支店　電話番町五一〇番
牛込神樂坂　神樂坂支店　電話番町六三〇番
本郷一丁目角　本郷支店　電話下谷七二番
神田須田町　須田町支店　電話本局二〇七三番
兩國米澤町　米澤町支店　電話浪花二五九〇番
淺草吾妻橋通　吾妻橋支店　電話下谷七三番
南品川一丁目　品川支店　電話新橋一一三九番
横濱吉田町　横濱支店　電話横濱一三〇四番
日本橋坂本町　代理店　田中銀行　電話浪花二四〇番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

輕便 瓦斯の煑燒 德用

瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮燒用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

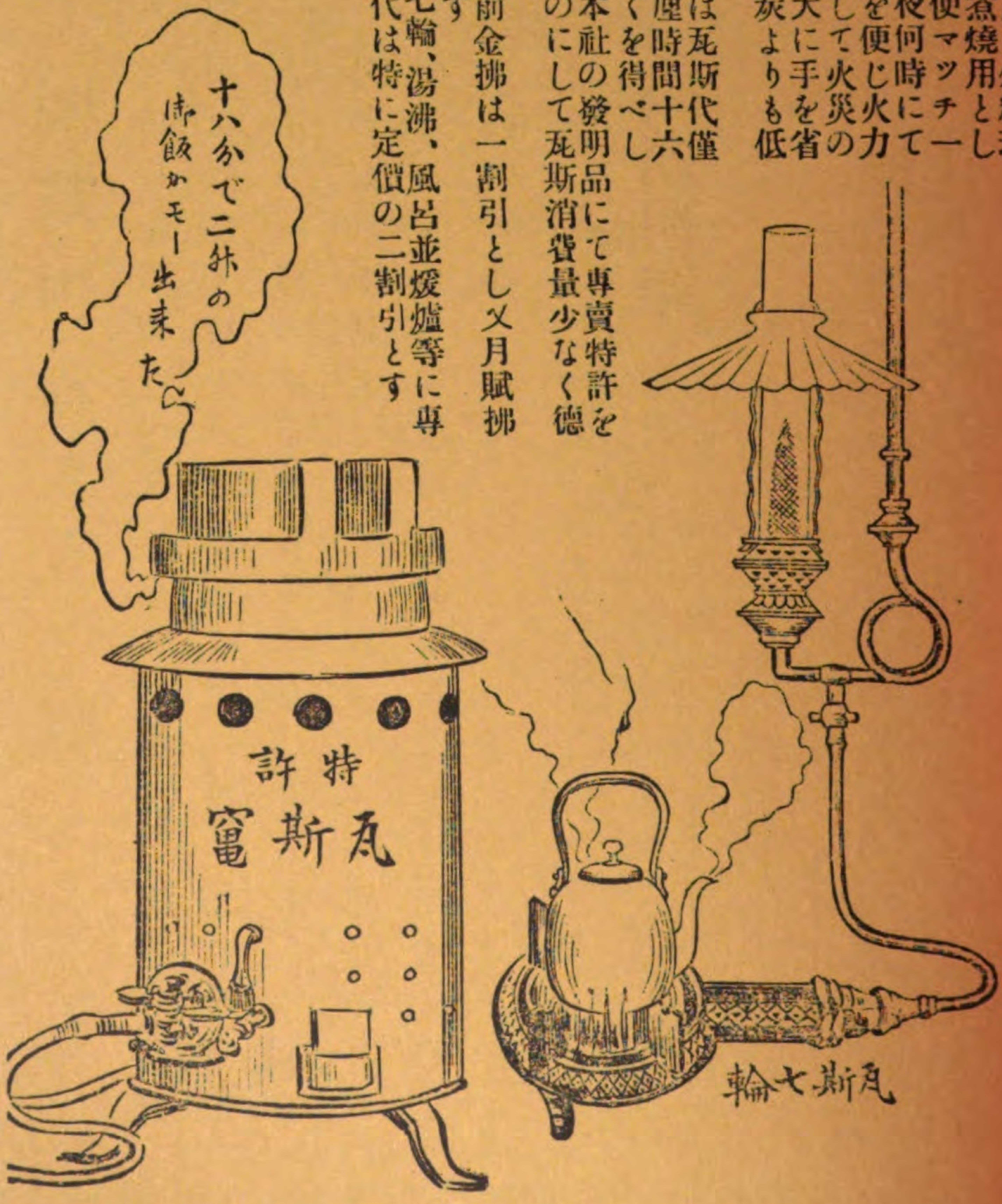
○三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十六分にて炊くを得べし

○瓦斯竈は本社の發明品にて專賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく德用便利也

○工事費は前金拂は一割引とし又月賦拂にて約定す

○臺所竈、七輪、湯沸、風呂並煖爐等に專用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

尚各種式新器具は當社構内陳列所又は銀座陳列所さへ陳列縱覽に供居候御立寄御一覽被下度候



東京神田錦町 東京瓦斯株式會社

▶再版愈出來◀

戰爭美談

堀紫山、森大狂共編

出征軍人留守宅、又は遺族の慰藉たり、兼ねて我が勇敢なる兵士の働作を天下に傳へて、聊か世の需用の一部に應ぜんとの本意なりし處、幸にも望外の好評を博して、終に再版を出すの運に至れり即ちこゝに萬朝報の批評を轉載して、姑らく自賛に換ゆる事とせん。

萬朝報評

堀紫山森大狂の兩文士が編纂せしものにて日露戰爭の爲めに起れる斯る雜書中にては出色の物にては逭がに整頓したる上面白く總體に上品なり

△菊判立形美本△寫眞石版挿畫△紙數百五十頁△一部定價金拾五錢（郵稅金四錢）

發行所　東京市京橋區新湊町一丁目十七番地　由分社